
World of Fantasy After

ピエロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy After

【Nコード】

N4419U

【作者名】

ピエロ

【あらすじ】

記憶力0、意地汚い、面倒くさがり、ダメ人間の代名詞なのに何故か強い主人公的存在 桂峰 神紅は自分が異世界にいるということを忘れていた。それでもって食事をすることも忘れて森の中で倒れていたところをエルフの少女 ラクア・ローレンスに助けられ向かう方向が同じという理由でとりあえず一緒に旅する。そして主人公は異世界で何をするのか？ そんな異世界モノのファンタジーなストーリー。

プロローグ とある森の中で

「ハラ減ったなあ… ぼくもう死んじやいそう…」
ぼくは今倒れている、体に力が入らない。

（どうしてこんなことになったんだっけ？）

「……………」

（ダメだ、まったく思い出せない… 誰か人でも来ないかな？）

「……………」

（来ないだろうな、こんな森の中じゃ… どうしてこんな森にいるんだっけ？）

「……………」

（本当にダメだ、まったくもって思い出せないや、それになんだか眠くなってきたなあ…）

「……………」

（ああ… でも こんなところで寝たら魔獣に襲われちゃうな）

「……………」

（ん…ここはいつそ寝てみようかな？ 起きていても何もできないし、魔獣が来ても助からない）

(…うん、寝よう)

(ああ、でも、どうせなら気持ちよく眠れるといいな)

第一話 黒い行き倒れ

「ん……」

（もう朝……早いなあ……）

ぼんやりした意識のままベッドから起き上がりカーテンを開ける、
日差しが目を突き刺す。

「まぶしい……」

思わず声に出してしまっただけ眩しい。

（眠い……な、とりあえず顔でも洗って朝食をとろう……かな？）

（さて、次はどこに行こうかしら？）

完全に目が覚めたわたしは朝食のスープを飲みながら考える。

（ん）この辺で一番有名なのはオーエン城とその城下町かな、ああ……でも前の王が死んでからあまりいい噂は聞かないからなあ……、ここは危ないけど森を抜けてナルサ村に行く方がいいかな？）

（……うん、そうしよう　そうと決まれば早速準備しなくちゃ）

朝食を食べ終えて手短に荷物をまとめ、わたしは宿屋を後にする。
森には徒歩でも数十分ほどで着くが、その森は森といってもかなり広いらしく、迷うとなかなか出られないと少々厄介な森らしい。

（まあでも、道から外れなければ日没までには抜けられるらしいし
…大丈夫よね？）

――森を進むこと3時間――

どこを見ても木しかない森の中で妙なものを視界の端にとらえた。

「ん？何かしら？」

近寄ってみるとボロ布のようなものが落ちている。

「……………」

よく見るとボロ布の間から足が出ている。

「人！！」

（生きてるのかな？）

わたしは近くにあった木の棒で突っついてみる。

…モソモソ…

（よかった、死んではいないみたいね）

今度は起こしてみようとビシバシと叩いてみる。

「起きない……………」

今度はもつと強く叩いてみる。

「・・・・・・・・ガウ!!」

「きゃっ!!」

いきなり棒に噛み付いてきた。

わたしは思わず尻餅をついてしまう。

「あれえ?ここはどこ?」

キョロキョロと辺りを見回し、とぼけた声で言う謎の行き倒れの
人。

(・・・・・・・・何なのよ、この人・・・・・・・・)

第二話 遠い国から？

わたしはまだ辺りを見回してる黒服の男の人に声をかける。

「あなた何者なの？ こんなところで何してたの？」

わたしが声をかけると、彼は初めてわたしに気づいたかのようにこちらを向く。そして口をポカン 開けたまま静止する。

「・・・・・・・・」

――2分が経過――

わたしはもう一度声をかける、すると・・・

「・・・忘れちゃった、ぼくって何者なんだろう？」

信じられないことを言った。

「・・・・・・・・」

（この人…何を言ってるの？ 自分のことを忘れるなんて…）

わたしは言葉が出ない。

「じゃ、じゃああなた名前は？」

別の質問を試みる。

「・・・忘れちゃった」

彼はサラリと言った。

（・・・信じられないわ、普通自分の名前を忘れるかしら？）

「じゃあ、何か自分のことがわかるものはないの？」

諦めず聞いてみる。すると彼は皮の袋を取り出し、中身をばら撒く。

どこから出したかは謎だけど・・・

しかし、その中身はノート一冊にペンが一本、銅貨三枚に石ころがひとつと透明できれいな丸い玉が少数と、大したものが入っていないかった。

わたしはそこからノートを手にとってみる。するとそこには決してうまいとはいえないような字で、『桂峰 神紅』と書いてあった。

「あなたの名前ってコレ？」

ノートに書いてある名前を指差して、わたしは聞いてみる。すると彼は思い出したかのように手をポンと叩いて言った。

「そうだったそうだった、これがぼくの名前だ、ぼくは桂峰神紅っていうんだ なかなかカッコいいだろ？」

自慢げに彼は言ってくる。

「カッコいいのは別として不思議な名前ね、どこの国の人なの？」

わたしが聞いてみると、彼は遠くを見ているかのように上を向いて

「フツ…風にでも聞いてくれ」

なんて似合わないことを言う。

しかも丁度よく風が吹く…

(・・・こんなカツコつけたこと言ってるけど、きつと忘れたんだろうなあ)

「ところで君は誰？見たところ旅の途中かな？」

「え？ ああごめんなさい、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの、一応よろしくね。それにしてもよく旅してるってわかったわね？」

「ん？そりゃあゝいかにも冒険者ですって格好してるもん」

当然といわんばかりに言った。

「そうかな？動きやすさを重視した服なんだけどなあ…？ でもあなたの服も変わってるわよね、何 っていうの？」

「コレかい？これはね羽織と袴って、いわゆる『さむらい・すたいる』って言うんだ」

・・・聞いたことのない名前の服ばかりに少し戸惑ってしまふ。

「へえゝあなたのいた国って珍しいものが沢山あるのね」

「さあ？忘れちゃった」

とぼけたことを言うカツラミネさん、頭が痛くなってくる発言だ。

「それよりカツラミネさんゝよね？こんなところで何してたの？」

「・・・寝てた」

「どうして？」

「んゝ…そういえば何で寝てたんだろう？」

そういつてカツラミネさんは考え込む。そしてその時――

――ぐうつうつうつ・・・――

カツラミネさんが盛大にお腹を鳴らした。

「もしかして、お腹をすかして倒れたとか？」

「・・・どうやらそうみたいだ」

本当に頭が痛い・・・

「じゃあとりあえず何か食べる？」

わたしがそう言つとカツラミネさんはガバツと身を起こして言った。

「いいの？」

「少しだけよ」

そう言つてわたしは荷物から大きめの干し肉を取り出す。

「これでいいかしら？」

カツラミネさんはよだれを垂らしながらガクガクとうなずく。
わたしが干し肉を渡すとガフガフと食べ始めた。

「カツラミネさんはどこに行く途中なの？」

干し肉にかぶりついているカツラミネさんにわたしは聞く。

「ん？多分そうだよ」

口の中の肉を飲み込んでから言う。

「ふゝんどどこに行くの？」

「あっちかな？」

カツラミネさんがわたしの行き先と同じ方向を指差す。

「あら、それじゃわたしと同じ方向ね、どうせなら一緒に行かない？」

「ん？いいよ」

そう言って最後の一かけらを飲み込む。

「それじゃあゝあらためて、わたしはラクア・ローレンス、よろしくね」

「ぼくは桂峰 神紅、よろしく」

(ふふっ 少の間かもしれないけど楽しい旅になりそうね)

第二話 遠い国から? (後書き)

どうだったでしょうか?

ご意見、感想などありましたら ぜひ!!コメントください。

第三話 夜の一時

その後、多少魔獣と遭遇したもののどうにか日没前にナルサ村に着いた。が・・・

「カツラミネさん！どうして戦ってくれないのよ!？」

（遭遇した魔獣と戦ったのはわたしだけよ!）

「だって～面倒だし疲れるじゃん？」

「…わたしが疲れるのはいいってこと・・・それ？」

「だって君って剣の扱いがうまいだろ？」

「!?!」

（え？どうしてわかったのかしら・・・？）

「ん？どうしたの？早く宿でも見つけて休もうよ、疲れてるんだろ？」

「ちょっと待って!どうしてわかったの？」

「え？何が？」

「いや・・・その、わたしが剣を使えることよ・・・」

するとカツラミネさんは「ああ～そんなことが…」とつぶやいて言った。

「まずあれ？って思ったのは手かな？女の子の手にしてはマメは多かったからさ、あとは単純に太刀筋 が上手かったからそうじゃないかな？って思ったただだよ」

「・・・・・・・・」

（すごい観察眼だわ・・・とてもさっきまでボケてた人には見えな
いわ）

「さあ話はここまで、宿を見つけて休もうよ、もうお腹が減って倒れそうだよ」

「・・・そうね、早く見つけましょ」

（…カツラミネさんって何者なのかしら？）

・・・・それから約5分――

ようやく宿を見つけた。

「2名で1泊お願いね、あとご飯もつけてちょうだい」

わたしは注文する、わたしの横ではカツラミネさんがグデ〜と座り込んでいる。

「かしこまりました、いつ食事にします？」

宿の御上がそう言うと、カツラミネさんはサッと起き上がって言う。

「今すぐ用意してください!!」

「かしこまりました、それでは部屋へご案内します」

そう言って歩き出す御上をわたしたちは追いかける。

案内されたのは割と大きな部屋だった。しかし・・・

「何で一緒の部屋なの!？」

「さあ?どうでもいいじゃんそんなの、それよりご飯はまだかなあ
?」

そう言ってツウーとよだれを垂らすカツラミネさん。

「どうしてもよくないわよ!」

「しょーがないじゃん、一部屋しか空いてないって言うんだから」

「・・・それはそうだけど」

(やっぱり恥ずかしい、会ったばかりの人といきなり相部屋なんて
・・・)

そんなことを考えていると「お待たせしました」と言って御上が
夕食を持ってきて言った。

「ご飯だ!!!」

はしゃぎ出すカツラミネさん。

そんな彼を見ていると、恥ずかしいと思っていた自分がバカらし
くなってくる。

「ねえねえ早く食べようよ」

「……………そうね、食べましょ　わたしもお腹が減ったわ」

わたしがそう言っているとカツラミネさんが「いただきます」と言つてガフガフと音を立てながら食べ始める。わたしもそれにならう。

「そうそうカツラミネさん、いくつか質問していいかしら？」

スープをすすっているカツラミネさんにわたしは聞く。

「いいよ、何かな？」

ぷはぁとスープを飲み終えてカツラミネさんが言う。

「カツラミネさんって戦いとかできます？」

「さあ？どうなんだろう？」

「……………じゃあカツラミネさんってどこに行く途中だったの？」

「ハッキリした場所は忘れちゃった……」

「……………何歳なの？」

「ん……一番新しい記憶では１７歳かな？」

「ええっ!？」

「え？何？どうしたの？」

（信じられない…わたしより1歳年上なだけじゃない！）

「人って見かけによらないわね・・・」

「そうかな？」

「ええ・・・」

驚きのあまり言葉が出ない。

「そついえばラクダさん、君はどこに行くつもりなんだい？」

いきなり話をふってくる。

「ちょっと待って、ラクダさんって誰のこと？」

「ん？君の名前だろ？」

「ちがいます！わたしの名前はラクアです！ラクア・ローレンスっていの」

「ふうんまあいいや、で？どこ行く途中なの？」

「・・・エルフとか亜人のいる国よ」

「へ？人間以外にも人っているの？」

「え？そりゃもちろんいるわよ」

「君は……人間なの？」

「わたしは……エルフよ」

「へえ」

感心したように言う。

「どうしたのよ？」

「いやあ、エルフってみんなラクアさんみたいにキレイなのかな
って」

「えっ？わたしが……キレイって／＼／」

「ん？何？どうしたの？」

「別に……どうもしてないわよ／＼／」

突然の言葉に戸惑ってしまう。

「じゃあエルフがいるなら他にもそういう人たちがいるの？」

自分のご飯を食べ終えたカツラミネさんはわたしのご飯にそと
手を伸ばしながら言う。

「……ええ、他にも竜人族とか獣人族、ドワーフに人魚とかかしら」
なぜかそれに気づかないわたし。

「たくさんいるんだね」

「まあね、でも人間以外の種族を嫌う人たちは沢山いて、迫害したり奴隷として売ったり、中には理由もなく殺す人もいるわ」

「・・・・・・・・」

「だからそういったことのない国を亜人たちがつくったのよ」

「・・・・・・・・」

「理解してる？」

「もちろん！」

胸を張って言うカツラミネさん。

（自信ありげに言うけどきつと理解してないだろうな）

「まあいいわ、そろそろ……って、ちょっと！わたしのご飯がないじゃない！」

「あれ？どこにいったんだろう？」

「あなたが食べたんでしょ！？」

「失敬な！ぼくじゃない」

「・・・・・・・・・・はあ……もういいわ、今日はもう寝ましょ」

「そうだね、ぼくももう眠い」

そう言ってカツラミネさんはモソモソとベッドに入っていく。

「じゃあ明かり消すわよ」

返事がない、近ずいて見てみるとグワ〜と口を開けて寝ている。

(ふふっ おもしろい人)

「・・・おやすみなさい、カツラミネさん」

そうして明かりを消し、わたしもベットに入り眠りについた。

第三話 夜の一時（後書き）

意見、感想、などありましたらコメントください。

登場人物紹介

桂峰 かつらみね 神紅 しんく

身長・体重・歳・184cm・48キロ・??歳

・種族・人間

黒の和服にサングラスという奇怪なファッションの主人公的な存在。

忘れっぽくて意地汚く、そのくせ面倒くさがりで職業不詳の謎の多い男。

ラクア・ローレンス

身長・体重・歳・163cm・46キロ・16歳

・種族・ライトエルフ

炎髪灼眼の有名なあの方とは反対の水色の髪に蒼い眼の少女。

ハイド・ブライン

身長・体重・歳・176cm・62キロ・21歳

・種族・竜人

桂峰の奴隷1号。

歌って踊れて戦えて、たまに損な役割を担う竜人。

エリナ・アタランティア

身長・体重・歳・145cm・42キロ・15歳

・種族・ライトエルフ

桂峰の奴隷2号。

攻撃、回復、補助、といろいろな魔法が使える万能な少女。

ティネルローゼ・アルイーマ

身長・体重・歳・136cm・29キロ・12歳

・種族・獣人

桂峰の奴隷3号。

幼いながらも莫大な魔力を持っている少女。

石宗 豪

身長・体重・歳・170cm・55キロ・19歳

・種族・人間

エヴァン城の総大将を勤めている、ノリのいいやつ。

今は剣士だが前は暗殺・情報収集を得意としたチエイサーだった

桂峰の友人。

巡夜に好意をよせている。

雪咲 雅

身長・体重・歳・155cm・44キロ・18歳

・種族・人間

舞うように戦う舞姫という珍しい職業の桂峰の友人。

桂峰のことが気になっているとか・・・

伊志井 将

身長・体重・歳・171cm・52キロ・18歳

・種族・人間

かなり強いとか・・・なんとか

錬金術を使えるアルケミストで桂峰の親友。

巡夜 めぐりよ 星奈 せいな

身長・体重・歳・162cm・46キロ・19歳

・種族・人間

精霊使いという特殊な職業をしている桂峰の友人。

おっちょこちょいだが頼りになる人で、この人もまた・・・

第四話 朝の出来事

わたしはザワザワとした物音に目を覚ました。

（もう朝かあ）

「おはようカツラミネさん」

そう言っ てわたしは隣のベッドで寝ているカツラミネさんの方を見る。

「・・・・・・・・」

（まだ 寝てるみたいね・・・）

わたしはカツラミネさんの体を揺する。

「起きてください カツラミネさん」

「・・・・・・・・んん」

モソモソと動き出す。

「・・・・・・・・んんどうしたの？」

のっそりと起き上がった言っ。

「おはようカツラミネさん」

「・・・・・・・・おはよう」

「さっそくだけど出発の準備してね」

「・・・何で？」

「出発するから」

「・・・今何時？」

「そうね、6時30分頃かしら？」

「・・・まだ早い、寝る」

そう言ってまた眠り始める。

「ダメです！起きてください！」

わたしはカツラミネさんの足を引っ張ってベッドから引きずり落とす。

「グギャ！」と妙な声を上げて床に落ちる。

「大丈夫ですか？」

「・・・あまり大丈夫じゃないな、それに目も覚めたよ」

「そう、じゃあ準備して行きましょうか」

ニッコリと微笑んで言う。

「・・・」

「ん？どうかしました？」

「いや、何も・・・」

そう言つてカツラミネさんは準備を始める。

（何だつたのかしら？）

.....

「さて、どこに行こうかしら？」

「・・・ねえ、朝ごはんは？」

「ないわよ」

「どうして？」

「お金がないからよ　カツラミネさんお金持っていないから節約もしなきゃいけないの」

「・・・お腹減った」

「我慢してね」

わたしがそう言つと残念そうな顔をするカツラミネさん。

「しょーがないじゃない、ね？」

「・・・わかったよ」

「ありがとう　じゃ、行きましょ」

「どこに？」

「とりあえずエヴァンに向かいましょ　この大陸では一番大きなところだから」

「ふゝん了解」

「――こうして村を後にした――」

第四話 朝の出来事（後書き）

今回は少し短いです

すいません m (| |) m

第五話 昼の出来事

村を後にしてから約2時間

「ねえ、まだ着かないの？もう疲れたよぉ」

ダダをこねはじめるカツラミネさん。

「まだ2時間しか歩いてませんよ」

「何を言ってるんだい、2時間もだよ」

「・・・目的地まで2日はかかるわよ」

「なっ!!」

ガツクリと膝をつくカツラミネさん。

(うわぁ、面倒くさぁ)

「ほら、ちゃんと歩きましょう 歩かなきゃ着きませんよ」

「・・・・・・・・」

「おいていきますよ?」

「あつ いいこと思いついた」

「ん?何?」

「ふっふっふっこの疲れと空腹を癒しながら進む方法を思いついたのだよ!」

「へえゝ何かしら?」

「おんぶして」

「却下!」

「何ですよ?」

「当たり前でしょ! 馬鹿なこと言っていないで行きますよ!」

「ちえ」

そう言っしてしぶしぶと立ち上がるカツラミネさん。

(まったく、先が思いやられるわ・・・)

・・・それから約1時間――

「あっ見てくださいよカツラミネさん、あれって馬車じゃありません?」

「ええ? ああゝそうだねえゝ馬車みたいだね」

「でも何か様子が変わらない?」

「ふゝん 興味ないね」

「・・・カツラミネさんって友達少ないでしょ？」

「まさか〱１００人は軽いね」

「・・・まあいいわ あっ！ほら！道をそれて森に入りましたよ」

「へえ〱で？ どうすんの？」

「追いかけてみましょうよ」

「ん〱しょうがないな、面倒くさいけど」

わたしたちは追いかけて森に入る。

（ナルサ村の近くって森が多いのよね）

馬車を通ったであろう道を歩いていくと・・・奥から叫び声が聞こえた。

「ちよっ！今に何！」

「叫び声だね」

「行きましょ！ 何かあったのよ！」

「はいはい。わかったよ〱」

「もう！早く行きましょ」

妙に気分ののらないカツラミネさんを、おいて行く勢いでわた

しは森の奥へ走る

第六話 他人を襲うなんて・・・

森の中を走っていくと人らしき影が見えてきた、その中にわたしは飛び込む。

「あなたたち！何をしている！」

飛び込んだ先は倒れた馬車に決してキレイとはいえない服装の人たちと立派な服装の人、それに盗賊らしき者たちに馬と首のない人の死体がある。

盗賊らしき者たちは突然の登場に少し驚いた様子だった。

「あなたたち、何をしている」

わたしはもう一度呼びかける。

「ああ？なんだあ嬢ちゃん なんのようだあ？」

リーダー格らしき男が言う。

「もう一度問う、何をしている」

すると男はニヤニヤと笑いながら答えた。

「見てのとおり人を殺したただけだが？ そいつはちよいとワケありでな」

「あなたたちは何者だ」

「ハハッ！それも知らずに飛び込んできたのか！」

男は腹を抱えながら笑う。

「俺たちは聞けば誰もが泣いてひれ伏す偉大な盗賊団！『毒牙』だ！！」

ババン！と効果音が出そうな勢いで言う。

「いよお！さすが兄貴！」

噓し立てる子分。

「……まあいいわ、この場は見逃してあげる 去りなさい」

「ハッ！何言つてんだ嬢ちゃん？そんなこと言える状況か？」

そう言つてゲラゲラと笑う盗賊たち。

（まあ1対6じゃ誰もがそう言うわよね・・・）

「コレが最後よ 去りなさい」

「強気な嬢ちゃんだな、気に入ったぜ おいお前ら！殺さずに捕らえろ！」

「ヘイ兄貴っ！了解っす！」

「忠告はしたわよ！カツラミネさん、いくわぁ・・・よ？」

後ろを見るがカツラミネさんがいない。

（ええ？何でいないのよ！）

「何よそ見してんだっよっ！」

そう言つて一人が剣を振り下ろしてくる。

「まったくもう！ カツラミネさんってば！」

わたしは腰に納めてある剣を抜き柄の部分で向かってきた男のみぞおちを殴る。

男が白目を向いて倒れる。

一人目に続いて二人目が槍で突いてくる、それを体を逸らしてかわし下から剣を振り上げる。

ザシュッ！

（手応えあり・・・）

「ぎゃああああああ！」

叫び声をあげながら男が倒れこむ。

見ると右腕が男と一緒に転がっている。

「この野郎！」

二人がやられて怒ったのか、四人がいつせいに斬りかかってくる。

(む・・・四人いつせいか　しょうがないな・・・)

剣を下段に構える　剣に魔力を溜め込む。

「あなたが悪いんだからね！」

剣を振り上げ、魔力を放つ。

光がその場をおおい　4人盗賊たちは地面に倒れ　気絶した。

第七話 A s u r p r i s e a t t a c k

「なっ 嬢ちゃん！魔法が使えるのか！？」

4人が倒れたことであからさまに驚いてるリーダー格の男。

「ええ、といつても魔力を適当に放っただけだけど」

「っマジかよ！しゃーねーな今回は許してやる！次はないからな！」

ビシィ！ と効果音が出そうなくらいの勢いで指を指し、いそいそと部下を担ぎはじめる。

「あなた、このまま逃げられると思ってるの？」

「ふっ・・・嬢ちゃんこそ俺様を捕まえられると思っているのかい？」

「もちろん 逃がすつもりはないわ」

「ぶっははははははは！嬢ちゃんおもしれえな！俺様はご近所では『疾風のマルド』と言われるくらい 素早い奴だと言われているんだぜ」

（こいつの名前マルドって言うのか・・・どこかで聞いたような・・・）

「おしゃべりはここまでよ」

わたしは言い終えたのと同時に剣を下段に構えたまま姿勢を低くして突っ込む。

「おおお！？早えな！」

マルドはすでに部下を全員担いでいる。

（大人数担いでいる分動きは鈍るはず・・・でも少し大きめな体なだけなのにあの大人数担げるなんて

マルドも魔法が使えるってことかしら・・・）

（まあいいわ・・・）

わたしはブレーキをかけ、マルドの目の前に止まる。
マルドの右肩めがけて剣を振り上げる。

（捉えた・・・）

が・・・振り上げた剣は空を切り裂いただけだった・・・

（なっ!?!）

「ふっ嬢ちゃん おしかったな」

気がつくと40メートルほど先にある木の上に立って笑っている。

「あなた!どうやって!?!」

「まあまあそれは次の機会に、それまで覚えてろよなあ!」

そう言つてどこかに消えてしまった。

（・・・逃げたか）

わたしは周りに気を配りながら襲われていた人たちに歩み寄る。

「お怪我はありませんか?」

わたしは服の立派な人に尋ねる。

「あつ… ああ 助かった…一人殺られたが」

「ごめんなさい 助けるのが遅れてしまつて」

「いやっ！ そんな誤らないでください」

「…わかつたわ じゃあ何か手伝いましょうか？」

「じゃあ、馬車の中にみんなを入れてくれないかな？」

「わかつたわ」

わたしはキレイとはいえない服装の人たちを誘導し馬車の中に入るように言う。

（…この人たち、おそらく奴隷ね）

「ねえあなた奴隷商人よね？」

「え？ああそうだが」

「コレを気にやめてくれないかしら？こんなこと…」

「…」

「…もういいわ」

わたしはまた馬車への誘導はじめる。

「おねえちゃん危ない！」

いきなり知らない女の子の声が耳に届く。

「え？」

ドカツ・・・

頭の後ろに痛みを感じた。

それと同時に体に力が入らなくなり倒れてしまう。

「助けてくれたことは礼を言うぞ、だがこっちも商売だからなあ、売れる奴ならどんな奴でも売る、それが助けてくれた奴でもな！」

その言葉を最後に　わたしは意識を失った。

第八話 お助け参ろう！うまく決まればカッコいい台詞

目が覚めるとわたしは馬車の中だった。

「・・・あれ？・・・なんでこんなところに？」

（奴隷の人たちを馬車に誘導していたのは覚えているんだけど、そこから先が思い出せないわ）

そんなことを考えていると一人の少女が駆け寄って来た。

「お姉ちゃん 大丈夫？」

「え？まあ頭が少し痛むけど大丈夫よ ありがとう」

「そっか～よかった～」

そう言ってニッコリと笑う少女。

（・・・かわいい／＼／＼）

「お姉ちゃんどうしたの？」

「ええ！？いや・・・なんでもないわ」

「ふん そういえばお姉ちゃん名前は？」

「わたしラクア、ラクア・ローレンスよ あなたは？」

「わたしはティネルローゼ・アルイーマ、ティルって呼んでね」

「ええ、よろしくねティル それよりここはどこなの？」

「ここ・・・あいつの馬車の中だよ」

「あいつ・・・まさかあの奴隷商人の！？」

「うん・・・」

大変なことになってるわね、どうしたものかな・・・

奴隷の証の首輪もしっかりつけられているし、武器も盗られてる。

「・・・・・・・・」

「お姉ちゃん大丈夫？」

ティルが心配そうに尋ねてくる。

その動作がとても愛らしい。

（・・・かわいい／＼／）

「・・・大丈夫？」

「え・・・ああ大丈夫よ　ありがとう」

「うん・・・・・・ねえお姉ちゃん、これからどうなるのかな？」

「やっぱり奴隷として売られるのは怖いよね・・・」

「うん・・・」

「大丈夫よ、わたしの友達がきつと助けってくれるわ」

「本当!?!」

「ええ　普段は頼りない人だけどきつと来てくれるわ」

「いつ来るの？」

「そうねーそろそろ来てくれそうなのがするわ」

「本当!?!」

ティルとそんな会話をしていると馬車の動きが止まった。
すると外から話し声が聞こえる。

「おい！その人じゃまだからどいてくれ！」

奴隷商人の声

「いやあゝどいてもいいけど、奴隷たちを解放してくれたらね」

どこか気の抜けた声

「っ！ふざけんな！こつちも商売なんだよ！」

「いやゝね ぼくの友達もいるみたいなんだよ」

「知ったことか！そんなこと」

「じゃあ力ずくでもいいかな？」

「っ！ふざけるな！おいそこの竜人、あいつを殺せ！」

「はあああ！？おいおいご主人！俺今まで馬車引いてきたんだぞ！？」

「黙れ奴隷の分際で！いいから殺せ！お前を殺すぞ！」

「・・・了解」

そう言っ**て**ぶつぶつ言いながら剣を手取る竜人。

「あれ？ぼくが用のあるのはあそこの商人さんなんだけどな」

「すまないな、奴隷の俺は逆らえないんだ 怨まないでくれ」

「ん？大丈夫だよ」

「ど**う**いう意味だ？」

「こ**う**いうこと」

そ**う**いうと男の姿が一瞬で消えた。

「な**っ**！？」

「は**っ**は**っ**は**っ**こ**っ**ちだよ」

男が奴隷商人の真後ろに立**っ**て剣を首につけている。

「な**っ**！？い**っ**た**い**ど**う**や**っ**て！？それに俺の剣も！」

「ふ・・・風にでも聞**い**てくれ」

「・・・」

男の言葉に脱力する竜人。

「おい！竜人！何をしている！助ける！」

「もう遅いよ！商人さん」

「ひiiiiiiii！頼む！命だけは！」

「残念でした！もう助かりません！」

男が剣を振り上げる。

「いやだあああああああああああああ！」

その言葉を最後に商人の首が宙を舞った。

第九話　夕方頃の出来事

突然馬車が止まったと思った。たら今度は奴隷商人の叫び声が聞こえた。

「え．．．今の何!？」

ティルが驚きと怯えを混ぜた声を上げてわたしに抱きついてくる。

「大丈夫よティル、わたしの友達が助けに来てくれたのよ」

「本当!？」

「ええ、さっきの悪い人をやつつけてくれたのよ」

「本当に本当!？」

「わたしは嘘をつかないわ」

わたしが言うのと嬉しさのあまりかぴよんぴよん跳ねながらはしやぎ出す。

わたしたちの話聞いていたのか、他の人たちの表情も明るくなっていた。

「ラクダさ〜ん あなたは完全に包囲されてま〜す、速やかに出てきてくれないかな？」

テイルと話しているとどこか気の抜けたマヌケな声が聞こえた。

「わたしの名前はラクアですよ！」

またも名前を間違えられたわたしは思いっきり叫びながら馬車を出る。

「あ、見い〜つけた」

「カツラミネさん わたしの名前はラクアですからね？ ラクダじやありません！」

「何だ〜元気そうだね 心配して損したよ」

「あれ？心配してくれたんですか？」

（ちよつと意外だな〜カツラミネさんが心配してくれるなんて・・・
何か嬉しいわね）

「当たり前だよ ラクアさんが倒れでもしたら誰がご飯を作るのさ？」

（前言撤回！嬉しいなんて少しでも思ったわたしがバカだったわ！）

「どうしたの？そんな怖い顔して？」

「別に・・・何でもないわよ！」

「お姉えゝちゃゝん、どうしたのゝ？」

そんなやり取りをしているとティルが馬車から出てきた。
それに続いて他の人たちも出てくる。

「あ、ティルちゃん 紹介するね、わたしの友達のカツラミネさん」

「ぼくとラクアさんって友達だったの？」

「カツラミネさん この子はティルちゃん、仲良くしてね」

わたしはカツラミネさんの言葉を無視して続ける。

「そういえばカツラミネさん、この人たちどうするの？」

「ん？そのみなさんのこと？」

「そうよ、みんなお金だつて持ってないだろうし・・・」

「お金だったら奴隷商人のお金をみんなで分ければいいじゃん」

「でも服装とか・・・この格好なのよ？」

奴隷だった人の服装はみんな薄い布でできたもので、夜になったら流石に寒い。

「じゃあみんなを町まで連れて行けばいいのかな？　そうしたらあとは自分たちでもどうにかなるよ　ね？」

「まあお金にはあまり困らないだろうし、でもできるの？」

「その力持ちな竜人さんに頼めばね」

その一言でいっせいに竜人へ視線が注がれる。

「え？俺ツスか？」

「頼めるかしら？ええ」と・・・」

「ハイドだ、ハイド・ブライン」

「ハイドさんね、どう？頼めるかしら？」

「いやあそりゃ無理だ」

「え．．．でもカツラミネさんは．．．」

「無理なものは無理だ、あきらめな」

カツラミネさんはできると言ったが本人が無理みたいじゃ無理なのね．．．

「どうするの？カツラミネさん、無理だって」

「ハイド君、頼めるかな？」

「もちろんだぜ旦那！」

（はあ．．．？）

「できるってさ、よかったね、ラクアさん」

「いやいや、ちょっと待って！ この扱いの差は何？」

「ふっ．．．竜人は強いものに仕えるのだよ」

「．．．．．」

「よし！じゃあ早速準備しようか、ラクアさんに、ティルちゃんだっけ？ 手伝ってくれる？」

「もちろんよ」

「お手伝いさせていただきます！」

（あれ？ティルちゃんやけに気合入ってない？）

よく見ると目を輝かせてるし、何か頬が少し赤い。
いったいどうしたのかしら・・・？

第十話 出会い

全員の準備が整いあとは出発するだけになった。

（もう日が沈みかけているわね、出来るなら日が沈む前に町に着きたいわ）

「みんな準備できたわね？」

「おお~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

（みんな元気いいわね・・・）

「それじゃハイドさん、お願いね」

「ふんっ 言われるまでもない、下がってろ」

そう言っ て全員と距離をとり体に力を込めはじめる。

「うおおおおおおお・・・」

パキッ・・・メキッ・・・

ハイドの皮膚が乾いた音を立てて体の変形し始める。

「おおおおおおああああ!!」

バキバキバキッ!

「はあああああ・・・」

最後にもものすごい音を立てて体の変形を終える。

――竜化――

竜人族が使う変身能力であり、見た目は竜そのものに変身する。竜化を使うと筋力、耐久力、敏捷力、視力、聴覚、すべて感覚などが大幅にアップし、翼も生え飛行も可能になる。

「お・・・大きいですね・・・」

テイルが驚きの声を上げる。

確かに、竜化したハイドは体長が5メートルは超えている。

四肢は所々鱗がついて、太く長くなり、とても丈夫そうに見える。背中からは大きな翼が生えている。

胴体と顔はあまり変わっていないく、竜化というよりは半竜化とい

ったほうが近い形態になってる。

「おい！時間の限りが一応ある、早く馬車の中に入れ 馬車ごと持ち上げて運ぶ」

「わかったわ、じゃハイドさん よろしくね」

「ああ・・・」

そう言っただけでも馬車の中に入る。
カツラミネさんも馬車に乗り込んですでに寝てる。

(・・・まったく・・・のきな人ね)

カツラミネさんは口をがばーと空けてよだれを垂らしながら眠っている。

(今回はカツラミネさんに助けられたわね・・・まったく、不思議な人だわ)

「お姉ちゃん、あーそーぼー」

元気な声でテイルが話しかけてくる。

「いいわよ、あつカツラミネさんも起こしましょうか」

「ふえ！？だつ・・・大丈夫です！起こさなくていいです！」

「え？何で？多いほうが楽しいわよ？」

「起こしちゃ悪いですから・・・もう／＼」

「ふゝん、まあそこまで言うなら あっ！そのエルフの子！一緒に遊ばない？」

「・・・え？ 私・・・ですか？」

いきなり声をかけられたからだろうか、少し驚きの声を上げて言葉返してくる。

「そうそう！ いやあゝこんなところで同族に会えるなんて思ってもなかったわ」

「え？・・・あなたも・・・ライトエルフなの？」

「うん、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの よろしくね」

「あ・・・えつと私はエリナ、エリナ・アタランティアです」

「私はティネルローゼ・アルイーマっていうの、ティルって呼んでね」

「うん、よろしくねティル」

新しく友達も出来て、それから楽しく遊びながら過ごした。カツラミネさんは相変わらずで、ずっと眠り続けている。

（やっぱり平和が一番よね）

第十一話 再開？

出発してから約2時間、太陽は沈みあたりは暗くなってきた。

「そろそろ着くぞお！」

ハイドさんが大きな声で伝えてくる。

「わかったわ〜！ よしみんな、降りる準備して」

「はい」

各自準備に取り掛かる。

「あ、ティルちゃん カツラミネさん起こして」

「ふえ？わ・・・私ですか！？」

顔を赤くして驚いたように聞き返してくる。

（ん〜どうしたのかしら？・・・まあいいか〜）

「じゃ、よろしくね」

「え！？あつ！あつ・・・」

口をパクパクさせながらおどおどしてるティルちゃん。

（かわいい／＼／＼）

と、そこまで考えたところで思考を切り替え準備に掛かる。

――それから数分後――

ドンツと馬車が揺れ 無事に到着した。

「おおーい着いたぞ！」

「よし、みんな降りて」

みんなを誘導してとりあえず馬車から降ろす。

「ああ・・・腕痛えーもう腕がパンパンだよ、お前たち重すぎ！
痩せるという事を知らないのか！」

ハイドさんが文句を言い始める。

が、ハイドさんの発言で女性全員がハイドさんに殺意のこもった目を向ける。

もちろんわたしも・・・

「ハイドさん、誰が『重い』ですって？」

「ああ？何だラクア？どうかしたか？」

「奴隷でまともな食事もらえない・・・それに加えて女性に『重い』って言うのは失礼じゃなくて？」

「あつ・・・」

ようやく自分が爆弾発言したことに気がついたのか、だらだらと汗を流し始め男性の方へ助けの目をむける。

わたしに続いて女性全員がハイドさんに詰め寄る。

「いやあゝアレだ！言葉のアヤだ！なっ？」

必死の弁解。

「言い訳はそれだけですか？」

笑顔で切り捨てる。

それからまもなくハイドさんの叫びが響いた。

男性は皆下を向き「ハイド隊長お〜」やら「隊長の勇姿は忘れな
いつす!」やら「隊長!漢ツス!」

などなど涙を流しながらつぶやいてる。

そんな時・・・

「おい、お前たち!そんなところで何をしている!」

一人の男が大声を上げ、尋ねてくる。

格好を見るとどうやら兵士らしい。

「あ・・・えつと・・・私たち旅の者です」

エリナちゃんが答える。

「旅の者?そんな大人数でか?」

怪しげな目を向ける兵士の男。

「はい、私たちは奴隷ですので用件の方はどうかご主人様に」

「んっ……では少し待っててくれないか？上官を呼んでくる」

「分かりました」

そう言って兵士は走って行ってしまう。

「エリナちゃん、ありがとう 助かったわ」

「いえ……どうもです」

ペコリと頭を下げて言う。

――それから数分後――

他の兵士に比べるとはるかに立派な鎧を身に着けた男と大勢の兵士が来た。

「お前たちが旅の者か？」

立派な鎧の男が言う。

「はい」

礼儀正しく答えるエリナちゃん。

「確か奴隷なのだったな、お前たちの言うご主人様に会わせてくれないか？」

「分かりました、少々お待ちください」

そう言って、馬車へ向かっていくエリナちゃん。

（そういえばティルちゃんとカツラミネさん、どうしたんだろう？）

そんなことを考えていること約3分。

目をこすり、あくびをしながらティルちゃんとカツラミネさんが馬車から出てくる。

（あゝティルちゃんも寝ちゃったのかゝ）

「カツラミネ様、こちらの方がお話があるそうです」

エリナちゃんが言う。

「んゝ話？あゝめんどくさいから帰ってもらってよ」

手をひらひらと振ってあくびをしながら馬車に戻ろうとするカツラミネさん。

「カ・・・カツラミネ様！待ってくださいよ」

カツラミネさんの足にしがみついて止めようとするエリナちゃん。
まるでダダをこねた子供のよう。
そんなやり取りをしていると・・・

「桂峰！？桂峰じゃないか！？」

立派な鎧の男が驚きの声を上げる。

「ん？誰？」

本当に分からない、といったように答えるカツラミネさん。
相手の方は知っているみたいだがカツラミネさんの方は覚えがないらしい。

「豪だよ！石宗 豪！」

「んゝ．．．さあ？覚えがないや」

「はあ！？何言っただよ？」

どうやら話がかみ合っていないらしい。
いったい何がなんやら．．．．．。

第十二話 日本の朝は酢豚とビール

目が覚めるとそこはそれはそれは立派な部屋だった。

（あれ・・・？何でわたしこんなところに居るんだっけ・・・？）

思い出せない・・・

それから数分間思い出してみようと試みる。

「・・・・・・・・・・」

（あっ・・・）

「思い出した・・・」

「――時間を遡って昨日の夜――」

「俺だよ！俺！ 石宗だよ！」

「だからあゝ知らないって言ってるでしょ？しつこい人は嫌われるよ？」

先ほどの威厳の漂う態度はどこへ行ったのか？カツラミネさんが「知らない」の一点張りの答えに慌てるイシムネと名乗る男。そんなことはお構いなしにそっぽを向くカツラミネさん。

「あのゝ旦那？ その人知り合いじゃないんですか？」

ハイドさんが言う。

「君まで何を言ってるんだいハイド君、ぼくはこんな人知らないって先から言ってるだろ？」

「でも旦那・・・向こうは知ってるみたいですよ？」

「他人の空似だよ」

やれやれといった感じにいうカツラミネさん。

「・・・・・・・・」

その横ではなにやらイシムネさんという男が考え事をしてる。

そしてハッと顔を上げて言う。

「桂峰くお前腹減ってないか？それに宿とかどうするんだ？何ならこっちで用意するぞ？」

その言葉にピクツと反応を示す。

「ああくそういえば確かステーキが山のようにあったなあく」

更なる追い討ち。

カツラミネさんの口からよだれがツーンと垂れる。

「いやあく思い出した！そうだよイシムネ君じゃないか！早く言ってくればいいのになくまったく」

「くくくくくくくくくくくく」

その場に居たほとんどの人がカツラミネさんに白い目を向ける。
もちろんわたしも。

「さっ！何ボサつとしてるんだい 早く行こつじゃないか！」

鼻歌を歌いながら歩いていくカツラミネさん。

「ねえ、ティルちゃん、エリナちゃん、ああいう大人にはなっちゃダメよ……」

わたしの言葉に首をかしげる2人に思わずため息をついてしまう。

（こうなったら わたしが良いほうに導かないと！）

そう意気込んでわたしも後を追う。

わたしの胸に新たな決意が生まれた夜だった。

――――

と……そこまで思い出してベッドから起き上がり、着替えて部屋を出る。

すると同じようにエリナちゃんとティルちゃんが部屋から出てきた。

「あつ ラクアお姉ちゃん」

「ラクアさん おはようございます」

「2人とも おはよう」

「ラクアさん ご主人様はどこに居るか分かりますか？」

「ご主人様？ああカツラミネさんね、ごめんなさい 分からないわ」

「そうですか・・・」

「とっとうか、何でカツラミネさんがご主人様なの？」

「ご主人様はご主人様ですから、どうかしたんですか？」

「いえ なんでもないわ・・・」

3人で話していると今度はハイドさんが部屋から出てきた。

「ん？お前たち何してんだ？」

「あゝハイドさんだ おはよう」

「お？テイルか、よい朝だな どうだい？これからお兄さんと散歩
でもないか？」

「おはようございます ハイドさん」

「おはようハイドさん 朝っぱらから何言ってるの？」

「うるせえなあゝ邪魔するんじゃないやねえよまったく・・・ そうだら

クア、旦那はどこにいるかわかるか？」

「さあ？まだ寝てるんじゃないかしら？」

すると突然・・・

ゴーンーゴーンーゴーンーゴーンー・・・

大きな鐘の音が鳴り響いた。

「今のが目覚ましの時間みたいね、この音だしカツラミネさんも起きてくるんじゃないかしら？」

「・・・いや、旦那だし微妙なところだな」

それから何分たっただろうか・・・

ハイドさんの予想通りカツラミネさんは一向に姿を現さない。変わりに別の男が姿を現した。

確かイシムネ・ゴウという男だ。

「やあみんな！おはよう！いい朝だね！」

なぜか無駄にテンションが高い気がする・・・

「ええ・・・とイシムネさんですよ？　おはようございます、どうかしましたか？」

そんなイシムネさんに礼儀良く対応するエリナちゃん。

（さ・・・さすがだわ・・・わたしには真似できないわよ　あんな対応・・・）

「おおー確か桂峰の連れのヤツだよな？ご丁寧にどうも　そうだが、桂峰はどこにいるか知ってるか？」

「ご主人様ですか・・・おそらくまだ眠っていらっしやると思いますが」

「マジかよー相変わらずだなあー」

「あのお・・・イシムネ様はご主人様のお知り合いの方なんですか？」

「ん？そりゃあもちろん　昔にいろいろあつてな」

「よかつたら話を聞かせてもらえませんか？」

「え？」

「いえ、わたしたち実はご主人様について何も知らないんです、どういうお方なのかも」

「へえゝ意外だな、俺はてっきりいろいろ知ってると思ったんだが・・・」

本当に驚いたかのように言う。

確かに・・・

確かにわたしたちはカツラミネさんについて何も知らない。強さだって、きっとわたしやハイドさんより強いと思う。

（知りたい・・・）

カツラミネさんやイシムネさんの過去に何があったのか・・・
カツラミネさんがどういう人なのか・・・

「そうだなゝまあ本人も寝てるし、時間つぶしにな　話してやるよ
○　」

不適に笑ってイシムネさんが言う。
言葉の最後が妙にナマっている。

（んゝ何なんだろ？　こんな人たちばっかなのかな？カツラミネさ
んの周りって）

第十三話 金持ちの朝は決闘？

町がにぎやかになりかけている時間。

イシムネさんに連れられ、食堂で朝ごはんではあるがまた微妙な時間で食事をとっている。

わたしやみんなが食べ終わる頃にエリナちゃんが口を開く。

「イシムネさんってこんな豪華な暮らしをしてるんですね」

感心したように言う。

「ああ、確かに、職業柄大事な役職だしそれなりに金ももらってるからね」

「そうなんですか？どんな職業をしていらっしゃるんですか？」

「この国のな、軍の総大将をやってる」

「総大将だっけ！？アンタそんな強かったのか！？」

イシムネさんの言葉を聴いてハイドさんが大声を上げる。
実際わたしも驚いた。

（人って案外見かけによらないのね・・・）

「フツ・・・まあね　少なくとも君よりは強いぜえ」

ハイドさんの驚きように調子にノツたのか、自慢げにそう告げる。

「ちょっとまってや！俺がアンタより弱いだと？聞きづてならねえなあ」

「お？何だ？　俺とやるのかい？」

「言ってくれるじゃねえか　いいぜ、やってやるよ」

何だかよく分からないけど一転しておかしな空気になってる。
やるゝとかやらないゝとか　男ってこんなのばかり・・・

――――

朝食を終え、城のすぐ隣にある軍備施設にある広場にわたしたちは移動する。

「へっ 謝るなら今のうちだぜ？ 総大将さんよ」

「言っとけ、勝つのは俺だかな」

挑発のし合いでより険悪な空気になってきてる。

2人とも額に青筋を立てながら「へっ へっ へっ」だの「あははははは」だの笑いあってる。

目が笑ってないけど・・・

「まったく・・・どうしたらこうなるのかしら？」

「いいじゃないですか、2人とも楽しそうだよ？」

わたしの疑問に笑顔で答えるティルちゃん。

（楽しそう・・・ねえ）

「確かに、ご主人様とイシムネさんの昔の話をしてくれるってのからは大分離れてますよね」

さすがエリナちゃん、わたしの言いたいことを分かってくれていたらしい。

「まあいいけど、それよりハイドさんとイシムネさんどっちが勝つと思う?」

「私はハイドさんだと思います、ハイドさんはああ見えて結構お強いんですよ」

「へえゝ意外ね」

「テイルはねえゝ引き分けだと思うなあ」

「あら、どうして?」

「んゝなんとなく?」

小首をかしげながら答える。

(んゝ相変わらずテイルちゃんはかわいいわねゝちっちゃいし)

「あつそろそろ始まるみたいですよ」

テイルちゃんのかawaiiさに癒されているとエリナちゃんが始まりを教えてくれる。

「いくぜええええ!!」

「うおおおおー!!」

朝っぱらから盛大に叫び、ご近所迷惑もはなはだしいくらいに声が響く。

それが男の熱い？戦いの始まりだった。

第十四話 女性の一言に耳を傾けると時に我が身を滅ぼす

始まってからのくくらい経っただろうか？

最初は五分五分な感じの戦いだったが、今はハイドさんは呼吸に乱れが見える。

それに引き換えイシムネさんは若干余裕な表情。

「うらあああ！」

激しい掛け声とともにハイドさんが真っ直ぐな拳を放つ。

「うおお！？早ええ！」

その拳を体をそらしてかわすイシムネさん。

声には驚きが混じったように聞こえたが、表情は笑ったまま。

よけられたことを気にせずハイドさんは放った拳を素早く引き、

大きく身をひねりイシムネさんの顔面めがけて勢いよく肘を振るう。

が、大きくしゃがみこまれかわされる。

それと同時にイシムネさんが足払いをかけてくる。

「ちっ！」

ハイドさんが舌打ちをしながら後ろに飛び、かわしながら距離を開ける。

「いやあ〜ハイドだっけ？お前なかなかやるな」

「ふんっ！お前に褒められても嬉しくねえな」

「ははは、そりやそうだな　って、お・・・？」

イシムネさんが何かに気づいた様子でハイドさんの後ろを見る。
そこには兵士であろう格好をした人が沢山いる。

「イシムネさ〜ん、朝っぱらから何してんスカ？」

一人の男の兵士が声を上げる。

「見てのとおりの決闘だ！」

「はあ〜そりや大変っスね〜、まっ頑張ってくださいっス」

「おう！頑張るぜ！　おら他の奴も俺の勇姿をちゃんと見とけよ〜」

ニツと笑って見せてイシムネさんが言う。

「はあくい頑張ってくださいあくい」

そんなイシムネさんに一人の女性兵士が応援の言葉をかける。

イシムネさんの顔が緩み、手を振ろうととする。

その瞬間……

イシムネさんの顔が歪む。

「へぶうううう」

情けない声を上げイシムネさんが吹っ飛び　ズシャアアと盛大に地面に体をこすり、そのまま動かなくなる。

「この俺を前にしてずいぶん余裕じゃねえか」

ハイドさんが鬼の形相で言う。

が、ハイドさんのすさまじい一撃きを顔面にモロにくらったイシムネさんから返事は来ない。

「わあくハイドさんが勝った」

ティルちゃんが啞然としてる兵士を無視してはしゃぎだす。
エリナちゃんもホッと胸をなでおろしてる様子。

「ハイドさん、さすがにやりすぎじゃない？」

「何を言うラクアよ、戦いにやりすぎもやらなさすぎもない！」

「それでも相手はこの国のお偉いさんなのよ？ 何かあったらどうするのよ？」

「その時は……ラクア、お前に任した！」

「任せません！」

（まったく……調子が悪くなるとすぐわたしとかに押し付ける
何だかんだでハイドさんもカツラミネさんに似てきてる……どうにかしないと……）

と、そんなわたしたちを横目にむこうの兵士たちが気絶したイシムネさんを数人で担いで去っていく。
するとその中の一人の男性兵士がこちらに走り寄ってくる。

「この度はおそらくうちの総大将殿が迷惑をかけたっス、どうか許してほしいっス」

そういつて深く頭を下げる。

「い・・・いえ、気にしないでください、何もそちらが全部悪いというわけではないですし」

「そう言ってもらえると助かるっス、何分あのような性格なので」

そんなことを話していると、向こうのほうで声がする、どうやらこの人を呼んでいるらしい。

それに気づいた彼は「どうやら呼んでるみたいなんでこれで失礼するっス」と言って行ってしまった。

「それじゃ、わたしたちも戻りましょ　そろそろカツラミネさんも起きてるでしょうし」

そういつてみんな城に戻る。

が・・・カツラミネさんはまだ起きていなかった・・・。

（いったいどのくらい寝たら気がすむのよ！）

わたしの心の叫びに答える者は、もちろんいなかった。

第十五話 死しても悔いのない人は果たしているのだろうか？

平穩・・・

それはいつまでも続くものだとその時までは思っていた。

昼になつてもなかなか起きてこないカツラミネさんをわたし、エリナちゃん、ティルちゃん、ハイドさんの4人でお越しに部屋に行った。

何度声をかけてもまったく返事がなく部屋を開けると予想外の光景。

血塗られた部屋、その中に横たわる剣に身体を貫かれた人。

見慣れた真つ黒な「和服」という着物を着込んだ細い身体。

漆黒の闇のようなサングラスをかけた見慣れた顔。

間違いなくわたしたちの知るカツラミネさんが血に塗れた身体で横たわっている。

「う・・・そ・・・」

「ご・・・主人・・・様？」

「おいおい・・・ウソだろ？旦那あ・・・」

「カツラミネ・・・様・・・」

それぞれが思い思いの言葉を発する。
もちろん皆 驚きが声に混ざってる。
それからイシムネさんが来るまで、この信じられない光景から目
が離せなかった。

―― Side 朝見恭平 ―――

（やった・・・とうとうやったぞ！）

俺は走りながらあまりの嬉しさに思わず笑いがこぼれる。

「ククッ・・・ハハハハ・・・ハッハッハッハ！」

（ついにあの忌々しい桂峰を殺してやったぞ！）

「アハハハハハハッ！」

（森の中では記憶を忘れさせることしか出来なくて焦ったが、結果
オーライだな）

（これで・・・これで・・・！）

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

一人の男の笑い声だけが、静かな森の中に響いた・・・。

第十五話 死しても悔いのない人は果たしているのだろうか？（後書き）

すいません・・・
今回は短いです。

第十六話　なあ・・・人は死んだらどこへ行く？

閉じていた目を開き身体を起こすとそこは予想外の光景。

きれいな川が流れる一面に広がった草木に覆われた緑の世界。
そんな中にヤケに目立つ建物・・・大きな城が築かれている。

「あれ？ぼくこんなところで寝てたっけ？」

人一人見当たらないこの場に空しく響くマヌケな声。

「とりあえずお城に戻ろうか、今日の朝ごはんは何かなあ？」

「ふあゝ」と欠伸を1つこぼしのそのそと起き上がり、長身の黒服男・・・桂峰神紅は歩き出した。

――時は少し前エヴァン城内――

探していたのだろうか・・・イシムネさんがわたしたち4人を見つけて駆け寄ってきた。

その足音に意識が現実に戻る。

「やあ君たち！そんなところで何してるんだい？」

「「「「「「「「」」」」」」」」

相変わらずというのか・・・テンションの高いイシムネさんの問いに答えられる者はいない。
皆暗い顔をしている、もちろんわたしも。

「おいおいどうしたんだよ？そんな顔してるっていいことないぜ？」

「「「「「「「「」」」」」」」」

さすがに様子がおかしいのに気づいたのか、口調が変わる。

「「「「「何かあったか？」

「「「「「その・・・カツラミネさんが・・・」

口を開くのはわたし。

そのまま部屋の中に顔をむける。

「おいおい桂峰がどうしたっ・・・て・・・」

わたしが顔を部屋にむけたことがどういうことが分かったのだらう……

何だ？といった感じの声をあげながら部屋の中を覗いたイシムネさんの声が、部屋の中の光景を目にした瞬間途切れる。

「……桂峰！」

一瞬ぼーっとしたイシムネさんがハツとし、素早くカツラミネさんに駆け寄る。

「桂峰！」

刺さっていた剣を抜き呼びかける　が　返事はない。
まるでただの屍のよう……

「おい！この中に治癒の魔法が使えるヤツはいるか！？いないならすぐに使えるヤツを呼んで来い！」

その言葉に残りの3人が意識を現実に戻したらしい。

「ええ……と、はい！私が使えます！」

エリナちゃんがすぐさまカツラミネさんに駆け寄り、治癒の魔法をかける。

「ヒール！」

淡い緑の光がやさしくカツラミネさんを包み込む。
カツラミネさんの身体から傷が徐々に消えていく。しかし意識は戻らない。

「ヒール！ヒール！ヒール！」

それでもあきらめずエリナちゃんが何度も魔法をかける。

「えぐっ・・・ひい・・・る、ひい・・・る、」

エリナちゃんが泣きながらあきらめずに魔法をかけ続ける。
淡い光は濃さを増しカツラミネさんの身体を包む、傷はもう跡形もなく消えている。

がやはりカツラミネさんの意識が戻った様子はない。

「ううっ・・・ひい・・・る」

「もう・・・もういいから・・・ね？エリナちゃん」

涙を流してるエリナちゃんにわたしは歩み寄り、声をかける。
イシムネさんも歯を食いしばり、うつむいている。

「カツラミネ様ああー！」

ティルちゃんが泣き出す。

ハイドさんも涙は流さないものの顔に手をあて、下を向いている。

「ご主人様あ・・・ご主人様あ・・・」

エリナちゃんがわたしに顔を押し当て、声をあげて泣き出す。
わたしはそんなエリナちゃんの頭をなでる。
するとわたしの頬に涙が流れる。

（ああ・・・カツラミネさん・・・）

（死んじやっただ・・・）

改めて、カツラミネさんが死んでしまったんだなと実感した。

（もう・・・話せないんだ・・・もう・・・一緒に旅も出来ないんだ・・・）

涙がぼろぼろと溢れ出す。

そんな時

カツラミネさんの身体が淡い蒼の光に包まれる。
ヒールではない光に。

「え・・・？」

信じられないことが起こった。
その蒼い光がカツラミネさん身体全体を包み込み、消失する。
するとそこにカツラミネさんの姿はなかった。

第十七話 「詐欺なんかにかかるワケねえよ!」とか思ってるやつに限ってかか

時は夕暮れ。

そろそろ食事をとつてもいい時間だが、とても食事をしようとは思えない。

今、大きな目の部屋でわたし、ハイドさん、エリナちゃん、ティルちゃん、それにイシムネさんが集まっている。

ティルちゃんは泣き疲れたのか、わたしの膝を枕にしてすやすやと眠っている。

長い沈黙・・・時間だけが過ぎていく・・・。

「なあ？あれはなんだったんだ？」

そんな深い沈黙を破ったのはハイドさんの言葉が、「あれ」の指すモノに答えるものはいない。

「そんなの俺だつて知りたいね」

イシムネさんが吐き捨てるように言う。

「あれ」・・・カツラミネさんの遺体が突然光に包まれ消えたこと。

いったい誰が？何のために？
謎だらけだ・・・

「イシムネさん、ご主人様を襲ったと思われる人物について何か心当たりとかありませんか？」

「まだ確証はない　が・・・もしそうならば最悪だな・・・」

「どういうことですか？」

「すまんが詳しいことは話せない、俺としては君らを巻き込みたくないんだ」

「そうですか・・・」

話が途切れ、再び長い沈黙。

日はもう沈みかけ窓の外が目に見えて暗くなっている。

「俺たちだけで考えても仕方ないな・・・今から仲間に連絡を取ってみる、すまんが少し席をはずす」

そう切り出しイシムネさんが部屋から出て行く。

「そうですね・・・私も少し疲れました　今日はもう休ませていただきますね」

エリナちゃんが疲れきった声で言う。

その表情には目に見えて疲労の様子が見え、眼が若干虚ろだ。

「すまないが俺も休む、もう何が何やら・・・」

そういつてハイドさんが立ち上がりエリナちゃんと一緒に部屋を出て行く。

（そうね・・・今日はもう休みましょうか・・・）

わたしも眠っているティルちゃんを抱きかかえ部屋をでて自分の部屋に向かった。

――――

「やっと繋がりましたか・・・」

誰もいない明かりの少ない部屋で石宗豪の声が響く。
手に持っているのは手のひらサイズの結晶。

「どうしたの豪くん？いきなりの連絡にビックリしちゃったよ」

手に持っている結晶が光、声を発する。
石宗の声に答えたのは女性の声。

「星奈さん、落ち着いて聞いてほしいんだ」

「何々？どうかしたの？」

「桂峰が殺された・・・」

「えっ・・・？」

その後数秒間、無音の世界ができる。

「推測なんです、殺したのは『ヤツら』じゃないかと・・・」

「・・・」

「星奈さん？」

「え！？あ・・・うん そうだね、『ヤツら』がね・・・わかった、すぐにそっちに向かうね！」

「お願いします、あと少し気になることがあるんですが・・・」

「どうしたの？」

「桂峰の遺体がいきなり消えたんです、星奈さん、どういうことかわかりますか？」

「ううゝんわかんない、精霊たちに聞いてみる？」

「話が早くて助かります、願います」

「わかった、じゃあ何かわかったらこっちから連絡するね」

「よろしく頼みます」

その言葉を最後に、結晶から光が消える。

それを眺めているとふと昔のことを思い出す。

（そいや言ってたな桂峰・・・「大事な家族がいるから死ねない」って・・・）

（かなり死亡フラグの立ってる台詞じゃねえかよ・・・恥ずかしいったらありやしねえ）

そんな事を思い出すと思わず笑いがこぼれる。

（「死ねない」んだよね？ 俺は戻ってくると信じてるぜ！桂峰！）

どうしてだろうか？

気づけば、思わず夕日に駆けていくようなシーンのありそうな熱
血友情モノでありそんな台詞を思えるくらい気が楽になっていた。
これが噂のお電話クオリティなのか？

第十八話 桂峰とMystery World ①（前書き）

今回は桂峰の話です

第十八話 桂峰とMystery World 1

歩くこと数分。

緑のあふれた世界には目立つ大きな城の城門の前にたどり着く。
が・・・門は大きく開けられそうにもない、だからといってこの
まま待っていても開く気配はない。

「んゝどうしたもんかなあゝ？」

小首をかしげながら思わずつぶやく。

悩んでいるうちに1分・・・2分・・・と刻々と時間が過ぎていく。

「んゝどうしよっ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おーぶんせさみ！・・・ハハあゝなんちゃって」

考えに考えたが、どうしたらいいか分からずとりあえず叫んでみた。

おかしい・・・

何かがおかしい・・・

そう思ったのは城を歩くこと数十分、使用人の姿すら見当たらないからだ。

なのにホコリ1つ見当たらない廊下、廊下の窓から見えるキレイに手入れをされた中庭。

中庭にある噴水や、池にすら汚れが見当たらない。

そして何より食堂らしきものがまったく見当たらないのだ！

「うううお腹減ったあゝ」

壁に手をつき覚束ない足取りで食堂と思われる場所を探し、さ迷い歩く。

ぐううううー

先ほどから30秒に1度のペースで腹がなっている。

「はあゝお腹減ったあああ・・・」

空腹に耐えながら歩いていると、大きな扉の前にたどり着く。

「も・・・もしかここが食堂か!？」

大げさに腕を大きく広げ、何かにすがるような声をあげて言う。
この扉からは何やら特別なものを感じる。

そう思うと自然と元気が出てきた、残った力を振り絞り期待を胸に思いっきり扉を開ける。

が・・・待ち構えていたのは残酷な現実・・・。

部屋の中には大きな丸いテーブルとそれに沿って一定の間隔でイスが並べられているだけだった。

「も・・・もはやぼくはここまでか・・・」

ガックリと膝をつきそのままボタンと倒れる。

ブロードウエーでもなかなか見られない迫真の演技だ。

そのまま動かなくなる。

それからしばらく経ったとき物陰から「何か」がこちらに歩み寄ってきた。

「・・・・・・・・」

しばらく、倒れた桂峰を無言で観察し、つんつんとつつき始める。

「・・・・・・・・」

まったく反応がないことに「何か」は安心したのか、気を緩める。

と、その瞬間――
ガバっといきなり桂峰が起き上がり。

「きゃっ！」

「何か」が驚きの声をあげる。
そんなことはお構いなく素早く後ろに回りこみ「何か」の首をとりいつでも首を絞められるように脅しかけ、口を開く。

「まったく、ぼくが空腹で倒れるまで出てこないなんて酷いんじゃない？」

脅しかけてるワリにはゆるい声で話す。
そこまできて気づく、自分が首をとっているのが小さな女の子だと。

「じ……ごめんなさい……お願い……殺さないで……」

女の子は身体を震わせながら怯えた口調で言う。

「別に殺す気なんてないよ」

このくらいの女の子なら大丈夫だろう・・・

そう思い、つかんでいた手を離し1歩分くらいの距離を開け今まで脅しかけていた少女を見下ろす。

少女はガクガクと震え、頭を手で覆い、その場で小動物のごとくうずくまっている。

そんな様子を見てしまうと、何やら罪悪感を感じてしまう。

「んゝ突然手を上げたのは謝るよ、もう何もしないからさ 顔を上げてよ」

「・・・ほ・・・本当に？」

「もちろん、ぼくはウソはつかないことで有名だからね」

怯える少女に笑ってみせ、手を差し伸べる。

少女はその手をつかみ立ち上がる。

「君ゝ名前はなんていうの？」

「私は・・・ミレイ・マナハート・・・です・・・ここ・・・の女神の一人です・・・」

「女神？」

「はい・・・女神です・・・」

よく分からないが照れくさそうに「えへへ」と笑いながら少女はいう。

女神・・・ねえ？こんなちっちゃい子供が？

「あのさ、ここってどこ？女神様がいるんだし天国とかなんか？」

「多分あなたの言う天国・・・じゃないです・・・ここ・・・天界です」

天国じゃなくて天界か

何が違っただろ？といいますが、何でぼくこんなところにいるの？

「ねえねえ、何でぼくは天界にいるの？ついさっきまで寝てただけなのに」

「その辺は・・・私には分からない・・・です」

思った疑問をそのまま尋ねたが、この子は知らないらしい。

が、「私には」ってことはもしかして他にも誰がいるんじゃないのかな？

「あのさ、この～天界にはさ他にも誰がいるの？」

「あ・・・はい・・・私のお姉様やお兄様もいます」

思ったとおりー

「じゃあさ、その人たちに会わせてくれる？色々聞きたいこともあるし」

「えっと・・・はい・・・わかりました・・・」

「ありがとう、ぼくは桂峰く神紅だったかな？　よろしくね」

「よ・・・よろしく願いします」

ペコリと頭を下げて言うその少女のしぐさは、まあ何とも可愛らしかった。

第十九話 桂峰とMystery World 2

その大きな城の中をてくてくと歩くちびっ子女神についていくとその足が1つの部屋で止まる。

「ここは？」

「ここは・・・お姉様・・・の・・・部屋です」

そう言つてその小さな手で部屋の扉をコンコンつとノックする。少しすると「どうぞ」と中から声が聞こえ、それに反応しミレイが扉を開ける。

部屋の中はカーテンにより光がさえぎられ、やや暗い。

そんな部屋を見回すが見事に何も無い。

部屋の中はベッドに机・・・と必要最低限のものしかおいていない。

「お姉様〜！」

部屋に入るとミレイが歳相応な幼い走りでベッドに座っている女性に飛びつく。

先ほどまでの若干怯え気味だった様子はどこへいったのやら・・・飛びつかれた女性は慣れているのか、ミレイを抱きとめ、その頭をやさしくなでる。

頭をなでられてミレイはくすぐったそうに目を細め、笑みを浮かべる。

ベッドに座っている女性はそんな彼女はやさしく見つめている。そんな様子の彼女に桂峰は思わず口を開く。

「モリオンですか？」

「違います」

脊髄から生まれたかのようなアホな言葉はたったの一言で否定される。

すると桂峰に ああ〜つい言っちゃったよ〜 といわんばかりの表情が浮かぶ。

そしてそのままガツクリと膝から崩れ四つん這いになる、その背中には寒さしか感じられない。

「プツ・・・フフフ・・・」

座っていた女性から笑みがこぼれる。

つられてなのかミレイも笑い出す。

「笑ってしまつてごめんなさい、少しおかしかったもので」

目元に浮かんだ小粒の涙をぬぐい微笑みながら言う、閉められた

カーテンからかすかに差す光がその顔をいつそう美しくする。

「私はフィノラ・マナハートと申します、以後よろしく願います」

そういつてペコリと頭を下げる、フィノラの透き通ったキレイな銀色の髪が揺れる。

ちなみにミレイも銀色の髪。

「あなたの名前は桂峰神紅さんですね？」

「ええ、そうですけど どうして知ってるのですか？」

むくりと起き上がり、気取った口調でいう。

「私はここ、天界からいつもあなたたちを見ていたので」

「ほお、ぼくはいつも女神様に見守られていたなんて、とんだラッキーボーイですね」

「あの・・・その・・・普通の口調でいいんですよ？」

「そう？でもなかなかキマっていたでしょ？」

「え・・・ええ・・・とても」

目を泳がせながら言うフィノラ。
そんなことにまったく気づかずに胸を張る桂峰。
微妙な空気が流れる。

「そうだ、ぼくがここにいてことはぼくは死んじやったのかな
？天国にも地獄にも行けずに」

「はい、確かに死んでしまいました」

「ふーん、そんな死んでしまったぼくに何のようなのかな？」

「話が早くて助かります、実は頼まれていたきたいことがあるの
です」

「内容は？」

「ある場所に行つてあるモノを取つてきてもらいたいのです」

「へえー女神様からの頼みごとか、名誉なことだね」

「では引き受けていただけるのですか！？」

フィノラが期待のこもった眼で、その透き通った声でいう。
が・・・

「やだ」

答えはNO。

「どうしてですか!？」

期待から驚きと焦りの声に変わる。

「答えは簡単さ、まず1に信用できない。2つ目、見返りにあまり期待できない。3つ目、お腹減ったし疲れた。4つ目、めんどくさい。そして最後・・・」

人差し指を立て、少し間を空けて口を開く。

「君たちはぼくが空腹で倒れるまでほつといたのが許せない!」

ズギューーーーーーン!

的な効果音がお似合いな感じで人差し指をビシッとむける。

「・・・・・・・・」

はじめのはいいとしても、くだらない理由で断る桂峰に言葉がな
い。

その間にも「頭が痛い」や「お腹が痛い」だの「胸焼けがする」
だの「足つった」などなど・・・

適当な言い訳をしきりにつぶやいている。

「あの・・・そんな理由なのですか？」

「そんなとは何だ！ぼくがどんな思いをしたかも知らずに」

「あ・・・その、ごめんなさい」

「まったくだよ、ということでお腹減った、何か食べたい」

「わ・・・わかりました！すぐ用意します！」

そっぴい残して勢いよく部屋を出て行くフィノラとミレイ。
足音が遠のいていくなか「きゃっ！」と可愛いフィノラの声
がした、おそらく転んだのだろう。

最初に見たときと大分印象が違っなあとと思う。

人間に使われる女神・・・残念極まりない光景だった。

第十九話 桂峰とMystery World 2（後書き）

感想やコメントなどありましたら、ぜひください。

第二十話 桂峰とMystery World 3

フィノラとミレイが部屋を出て行くこと数分、これは時間がかかるだろうと思うと段段と睡魔が襲ってきた。

「ふああゝ・・・ねむ・・・」

ポツリと言葉をこぼす。

そのまま睡魔に勝てずベッドに横たわり、の○太君にも負けず劣らずの速さで眠りについてしまう。

――――

眼を開けると見えたのは何の飾り気のない天井。

むくりと体を起こし欠伸を1つ、そのままボケゝとのんびりする。この起きた後のふわふわした感じがなんとも心地よい。

あれからどのくらいたったのだろうか？ などと考えながらごろんと今度はベッドに寝転ぶ。

布団や枕からほんのりと甘い香りがする。

「ご飯まだかなあ・・・」

ぐうううーとお腹がなり空腹を訴えてくる。
すると遠くからパタパタと足音が聞こえてきた、その音は段段と
大きくなってくる。

「桂峰さん 食事の用意がととのいました」

ガチャリと扉を開けフィノラが言う。

「本当？今すぐ行くよ」

起き上がり、寝返りなどでやや乱れた服を整えながら言う。

「な・・・なな・・・何をしてたんですか！？」

服を整えているとフィノラが何やら取り乱したような声を上げる。

「何って、眠くなつたから寝てたんだ」

「寝たって・・・わっ・・・私のベッドですか！？」

「うん、そつだよ 中中いいベッドだね、匂いもいいしぐっすり寝
れたよ」

そういつて伍星の評価をベッドに与える。

が、フィノラを見ると煙でも上がりそうなくらい顔を真っ赤にし、若干涙目でこちらを睨んでいる。

その肩はふるふると震えている。

「どうかしたの？」

「なっ・・・何考えているんですか！？じよ、女性の寝所にそそそそんな、みみみ淫らに入るなんて不潔です！不謹慎です！え・・・えっちです！」

「何でそうなるのさ・・・」

「とっ・・・とにかく！今すぐ出てってください！」

そういつてポカポカと叩いてくる、地味に痛い。

「わっ、わかったからやめてくれないかな？」

そんな言葉には返事もくれず、そのまま部屋を追い出された。

フィノラはというと追い出した後、思い切り扉を閉め、鍵をかけている。

その息遣いはやや荒い。

「まったく、何をそんなに慌ててるんだい？あつ、もしかしてご飯が冷めちゃうから急いでるの？」

「！！」

「それなら別に叩かなくていいよ、ぼくは結構熱めのご飯が好きなんだ」

「か・・・かつ・・・」

「ん？どうしたの？」

「桂峰さんのばかぁーーーーー！！」

そういつて「うわぁ〜ん」と涙を流し、声をあげながら走り去ってしまう。

途中でツルンつと足を滑らせ、べたああああんと転んだのが見えた。

初めて会ったときの落ち着いた雰囲気はもはや感じられず、よく転ぶなぁ〜などと思いながらその後を追いかけるのであった。

第二十話 桂峰とMystery World 3 (後書き)

感想などありましたらぜひください。

次回は出来るだけちゃんとストーリーを進めたいと思ってます。

第二十一話 桂峰とMystery World 4

食堂にたどり着くとスープにパン、サラダに炒め物など・・・
数々の料理が用意されていた。

料理の載った丸テーブルにそって置いてあるイスに座り、「いただきます」と手を合わせナイフとフォークを手に取り料理を口に運んでいく。

むかしの席に座ったフィノラがじいじと見ている、そんな彼女をチラッと見ると頬を若干赤らめながらぷいっとそっぽを向かれる。

「ふおふえふいひふえふお、ふいんふえんふおふえふあふいふおふあふえふふおふおふあふあひふあんふあふえ」

「あの・・・口の中のものを飲み込んでから話してくれませんか？」

口いっぱい料理を詰め込みながら話す桂峰に白い眼を向けていうフィノラ。

何やら態度がさつきより冷たいなあなどと思いながら飲み込んでいく。

ちなみにミレイはおいしそうにスープを飲み、満足げな表情で食事を楽しんでいる。

「それにしても、人間も女神も食べるものは同じなんだね」

ゴツキユンと飲み込み、口を開く。

「ええ、人間も女神もそのあたりは大して差はないですね」

「ふうん、ねえねえ2人とも歳はいくつなの？」

「女性にそのようなことを聞くんですか？」

「私？私はねえ〜もうすぐ8歳だよ」

フィノラがあまり気乗りしない口調で言う。

それに比べミレイの方は歳相応なやや幼さを感じる口調で言う。

フィノラと一緒にいるからだろうか？会ったばかりのような途切れ途切れで怯えた様子の言葉使いではなくなっている。

「8歳か〜将来が楽しみだね」

「そうですね、実際はもつと長く生きているんですがね」

「そうなの？」

「はい、元元女神や神子・・・神子というのはお兄様達男性のことですが、私たちは普通の魔法に加え1人1つ、固有の魔法が使えます」

「へえ〜そうなんだ」

「私たち中に時の魔法が使える者がいますので、魔法を使い時間流から外れています、ですので歳などは基本取りません」

「それはすごいね、フィノラさんは何が使えるの？」

「私も時の魔法が使えます、後はもう1人お兄様の中に時の魔法が使える者がいます」

「そうなんだ、じゃあミレイちゃんの8歳ってというのは？」

「女神もある程度歳を重ねてから時間流から外れます、ミレイは今の最中です」

「そうなのか、ミレイちゃん、いっぱい大きくなるんだよ？」

「うんっ！」

女神にもいろいろあるんだなぁと思う。
そこまで聞いて1番の疑問を口にする。

「じゃあ結局はどのくらい生きてるの？」

「女性にいう言葉ではないと思いますが・・・」

「いいじゃん別に、気になるんだし」

「・・・年です」

「ん？何々？聞こえないよ」

「174年ですう！」

聞こえないといわれたのを気にしたのか、大きな声で叫ぶ。
が・・・ハツとしたかと思うと顔を赤くして手で顔を覆い、動
かなくなる。

「なあゝんだ、オバサンなんだね」

何気なくつぶやいた瞬間――

音を立ててフィノラが「うわゝん」と泣き崩れた。

そんなフィノラの様子を見てミレイがあわあわと慌てている。

それから数分、ひと通り泣いたかと思うとミレイからそつと差し

出された白い布切れをもらい涙を拭き、キツとこちらを睨みつけて・

・

「オバサンじゃないもん！」

何とまあかわいらしい声と言葉使いでいつてきた。

「でも174歳って・・・ねえ？」

小首をかしげて尋ねると、またもじわりとフィノラの目元に涙が浮かぶ。

「ああゝわかった！わかったよ！うん、オバサンじゃなくてお姉さんね！いよおっ若い！」

内心めんどくさいなあゝとか思いながらなだめると、次第にフィノラの表情も和らいでいく。

それからは、ぱぱっと食事を済ませてしまいちょっとしたブレイクタイムは終わった。

「あの・・・桂峰さん、どうしても頼まれごとは引き受けていただけませんか？」

食後の紅茶を飲みながら、不意にフィノラが口を開く。

「だってめんどくさいじゃん？」

「ですが・・・その・・・こうしてここに呼んだのは私たちであつてですね、その気になれば消すことも可能なんですよ？」

脅しに出てきたなあゝと思った。
ならば答えは簡単。

「別に消してくれても構わないよ、頼んだわけじゃないしね、それにぼくがいなくなったら困るのは君たちじゃないのかい？」

消すという脅しを受け入れればいい。

それに消えて困るのはむこうであってこちらではない、困らないのであれば元元呼ぶ必要がないはずだ。

「・・・・・・・・」

フィノラは黙ってしまった。

どうやら正解のようだ。

まあ、あまりにも聞き分けが悪いとホントに消されるかもしれないけど、そうになったらそうだったでそのとき考えればいい。

「では桂峰さん、ごうじませんか？」

結んでいた口が開き、フィノラがいう。

「ん？なんだい？」

「もし、引き受けていただけたならば、成功したときの見返りとして……」

「見返りとして?」

「もう一度現世に蘇る、というのはどうでしょうか?」

「!」

破格の見返りだった。

現世への蘇生。

確かに悪くない条件だった。

フィノラは悩んでいる桂峰を見て、かすかに頬を緩め。

「明日の朝に部屋に来ていただけるとありがたいです」

そういい残し、紅茶を飲み終えたカップを食堂の奥へもっていき、戻ってくるとミレイと一緒に食堂を出て行く。

バタリ・・・と扉が閉まり、無音の空間に桂峰1人残される。

そんなことは気にせず、桂峰の頭の中では周りの無音な空気と違い、小さな桂峰があーだこーだと会議をしていた。

結局その夜は考えに考え、朝まで起きていて、そこでやっと考えがまとまったものだから朝に部屋に行くことが出来ず、フィノラに「女性の誘いを無視するなんて・・・」と文句を言われたのはここだけの話・・・。

第二十二話 桂峰とMystery World 5

今朝方は部屋にいけず、部屋に行ったのは昼を過ぎてからだった。そこで文句を言われたのはまあ置いておこう。

「結論は出たんですね？」

「うん、まあね」

眼を伏せ、静かな口調で言う。

この辺の清楚なあたりがさすが女神といったところなのか・・・。

「では、お聞かせ願えますか？」

「うん・・・、引き受けるよ」

「本当ですか!？」

嬉しそうに、そして安心したようにいう。

「よかったです・・・これで断られたらどうしようかと思ったいたんですが、本当によかったです」

ホッと安堵の息をもらす。

「まあね、色々あるんだよ」

「色々ですか？」

「うん、色々だね」

本当に色々あった・・・

どうするべきか考えているとき、死んだショックなのだろうか？
いろんなことを思い出した。

それを考えたらもはや考える余地はなかった。

「それでさ、ぼくはどこへ行けばいいんだい？」

「えっと・・・はい、この城を出て半日ほど歩いたところに大きな森があります」

「そこに行くの？」

「はい、それでその森の奥に大きな木があります、その木になる黄金の林檎を取ってきてもらいたいのです」

天界と黄金の林檎・・・お約束か・・・

「ふうんなるほどね、分かった、早速行ってくるよ」

「お願いします、案内はミレイに任せますので……城を出たところで待っていると思います」

「了解、それじゃーね」

軽く手を上げ部屋を出て行く。

そんな桂峰に笑顔で見送るフィノラ、その顔にはかすかに不安のいろがあつた。

――――

城を出た門のところでミレイはいわゆる体育座りの格好で座り込んでいた。

「やあ、おまたせ」

「あつ！桂峰さん、ここに来たってことは引き受けてくれたのですね！」

最初の頃とは大分変わった口調でいう。
どうやら警戒を解いてくれたみたいだ。

「うん、引き受けたよ、案内よろしくね」

「はいっ！お任せください！」

張り切った様子で言い、小さな歩幅で歩き出す。

それにあわせて桂峰も歩き出す。

そこで思う、このペースだと半日じゃ着かないのではないかと．．．と。

予想は的中、森に着くのに丸１日分の時間がかかったとさ。

第二十三話 桂峰とMystery World 6

草木をわけながら徐徐に薄暗くなっていく森の奥へと歩いていく。
ミレイは所々つまずきながら、それでもと一生懸命に小さな足で歩いていく。

その様子はとても微笑ましい。

「ねえねえミレイちゃん、黄金の林檎っておいしいの？」

黙々と歩くのがつまらい桂峰はミレイに言葉をかける。

「えーと、お姉様の話ではとてもおいしいらしいです」

「本当に？じゃあ余分にとってあとで食べようかな？」

「あつ、それはやめといった方がいいと思います」

「ん？どうしてさ？」

「お姉様が黄金の林檎は人間は食べない方がいいって言っていました」

「ふーん」

そんなことを話しながら森の奥へ進んでいく。

奥へ進むことにその暗さは増していく。

「そういえばさ、この世界にも魔獣とかいるの？」

「えっ・・・と魔獣とかはいないです、妖精さん達はたくさんいますよ」

「妖精かゝ会ってみたいな」

「あつ、でも気をつけてください、妖精の中には稀に『闇』にのまれて悪魔になってしまった妖精さんもいますので・・・」

「妖精から悪魔にねゝ、そうなるとどうなるの？」

「えっと・・・その・・・お姉様やお兄様がその・・・殺してしまいうらしいです・・・」

とても悲しそうな声でいい、その表情が暗くなる。

「ふゝん、それは大変だね」

「はい、だから桂峰さんも気をつけてくださいね」

「んゝ何に気をつけるの？」

「悪魔になった妖精さんはとても強いみたいで、お姉様やお兄様が全員でやらなきゃ手に負えないってお姉様が言っていました」

無理したかのように表情を明るくし、質問に答えてくれる。
とても優しい子だなあ〜と思う。

「なるほど〜それじゃ気をつけないとね、その悪魔になった妖精ってどんなの？」

「どんなの・・・と、いわれましても・・・あつ！ちょうどあんな感じのです！」

そう言つて指を差したのは・・・

全長3メートルを超え、黒い羽を生やし全身が黒い霧のようなモノで覆われた真つ黒な人型の悪魔と呼ぶにふさわしいモノだった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「もしかして・・・アレって本物？」

「えっ・・・・・・・・と、そう・・・みたいですね」

そっつい合つてアハハハハ〜と2人で噓れた声で笑いあふ。

ミレイの手をとり桂峰は走り出そうとする。
が・・・

ミレイがつまずき、転び　そのままぺたんつと座り込んでしまう。
 どうやら腰が抜けてしまったらしい。

「グアアアアアアアアアアア——！」

悪魔がもう一度咆哮をあげる。

ミレイはその声に「ひっ！」と声をあげる。

悪魔は歩きながら距離をつめてくる、そして腕を大きく振り上げ、思い切り振り下ろす。

「あああ——もうっ！」

吐き捨てるように言いミレイを抱きかかえ、思い切り地を蹴り大きく後ろに跳躍する。

その直後 桂峰とミレイのいた場所にズシンっ！とものすごい質量を感じるモノが落ちてくる。

そしてその場が大きく削り取られる。

「うわすうす」

後退しながら思わずつぶやく。

「さあ！いつつしょうたいむだ！」

発音の悪い英語を発しながら不適に笑う。

急転直下！ 悪魔VS桂峰の戦いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419u/>

World of Fantasy After

2011年10月31日03時11分発行